

はじめに

「学問の儀に就き、五山へ仰出され条条」（有節瑞保宛関白秀次書状）

☆室町初期より五山筆頭は幕府の僧録司として、朝鮮・中国外交を担う。中期以降は幕府の衰退により、その権限を失い、幕府執事と相国寺蔭涼軒庵主が担当。

## 一. 碩学制度の発端

- ①「神祖不学の僧の寺領多くして、碩学の僧の貧窮ならしむ事しかるべからず、さらば其の不学の僧の寺領をけずりて、その領を以て碩学の僧にあたふべしと仰せありしより、はじめて五岳の碩学僧といふ事は出来て、今も学才の聞くある者ども選びて、かの碩学領を賜ふ事にはなりたり。此時南禅の一寺のみ不学の僧一人もなかりしかば、此寺の僧のみ寺領をけずらるに及ばず、永く此寺の規模とは申す也。」新井白石『以町庵事議草』

☆五山 相国寺 天龍寺、建仁寺、東福寺、（万寿寺は室町中期に廃絶）

- ②「五山十刹諸山法度」一六二五（元和元）年

「一、庄園方今度指出之上、碩学科相定訖、選其器用、一代宛可省事。」↓血脈排除。

- ③『五山碩学並朝鮮修文職次出』（東福寺蔵）

「京五山第一靈龜山天龍寺 御朱印寺領毫千七百貳拾斛 内 三百斛 碩学科

但 碩学三員江拝領 東照神君御条目二碩学科御定被之上、菊嶮、玄英、舜岳

参員 碩学祿拝領。」

「京五山第二万年山相国寺 御朱印寺領毫千七百六拾貳斛 内貳百五拾斛 碩学領一員

「京五山第三東山 建仁寺 御朱印寺領八百貳拾壹斛 内毫百九拾五斛五斗七升余 碩

学領 碩学参員江拝領」

「京五山第四惠日山東福寺 御朱印寺領毫千八百五拾斛四斗余 内参百斛 碩学科

碩学四員江拝領」

## 二. 碩学僧の任命と任務

- ①江戸ぶの拝命 ②対馬下り（当番、代番 加番⇨前任者の任期切れによる交代）
- ③朝鮮遣信使の対馬・江戸間の接伴。（長老と朝鮮側では記録。対馬では書簡役、書役之僧、朝鮮書契之僧などともよんだ。）
- ④任期 一二年 定年は満七十歳。（対馬赴任を果たせなかった者もいた。）
- ⑤任務①宗氏作成の和文章案の漢文成文化
- ②宗氏の図書（銅印）を捺印の上、封には書役の印を捺印。控を保管。

③朝鮮側の文(漢文)の和訳の成文化。宗氏への手渡し。

三. 報酬 1) 江戸拜命の時、時服十領、白銀百枚を賜る。

2) 以町庵送使船の収入(利益)≧高麗人参他。

3) 対馬藩からの贈与 毎年現米百石

4) 通信使接伴時には臨時給与

5) 任務終了のちの待遇 南禅寺の「坐公文」を受帖。(準南禅位)

(いなるのくもん)

四. 対馬での住居(以町庵)のこと。

・以町庵 当初は現在の国分寺付近。のちに現在の西山寺に移る。

・景徹玄蘇(一五三七〜一六一二)

博多聖福寺僧。一五八〇(天正八)日本国王使として渡海。壬辰倭乱時には従軍僧として戦時外交に携わる。一六〇九(慶長九)年には己酉約条成立に寄与。

庵号はかれの生年(丁酉)にちなむ。日本国本光禅師の号を朝鮮国王から授かる国書偽造事件にも深く関わったと推定される。

・規伯玄方(一五七六〜一六六一)

玄蘇の後継者、以町庵二世住持。東福寺・南禅寺で修行を重ねる。一六一九(元和五)年、対馬に赴任。五山住持職と同じ扱いを受ける。

一六一九(寛永六)「日本国王使」として渡海。『御上京時毎日記』

国書偽造事件で処罰、南部藩へ流罪。のち許されて帰洛。南禅寺に寄寓。

★京都五山からの輪番僧の出身(同一人物の重複をのぞく)

・天龍寺 一七人(うち帰山後の本山住持就任は二四人)

・相国寺 二〇人(同上二九人)

・建仁寺 一九人(同上二九人)

・東福寺 二二人(同上二七人)

★★一六五八(万治元)のできごと。

規伯玄方より鳳林承章(鹿苑寺単住住持二世・勧修寺晴豊第六子)に黄精薬を贈る。

承章はこのうち一部を後水尾院に献上。玄方のソウル上京時求請中に薬種二〇種があったので、その持ち帰りと思われる。承章は翌年洛北杉坂に「黄精草」を採取。

承章『隔冥記』による。

梅軒は一八一(文化八)上通事本文圭のこと。

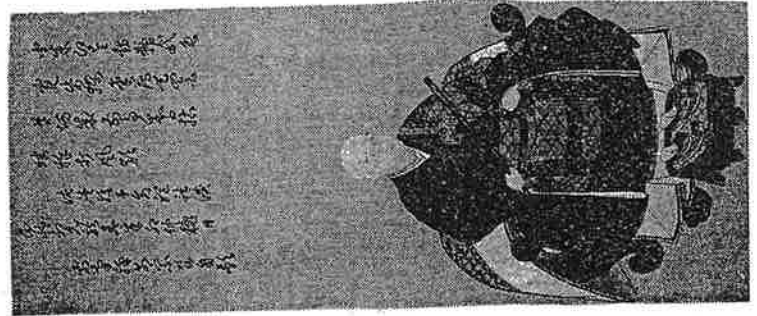
★★★丹後峰山(京丹後市)全性寺の扁額「全性寺 朝鮮 梅軒」

五 相国寺慈照院 別宗祖縁（一六六七―一七一四）と朝鮮通信使との交流

別宗祖縁（号が祖縁、号は別宗 本姓は佐々木氏。金沢の人で南禅寺で参禅し印可を受ける。一六九七年碩学・朝鮮修文職に任せられ、一七〇〇年に対馬の以直庵に轉住する。この間、一六八二（天和二）年には通信使が来日し、京都の本国寺で一行と交流、一七一（正徳元）年には加番役として大坂から江戸まで一行に隨行。一七一四（正徳四）年没。（「萬年山聯芳録」）

こくもく

呈<sub>レ</sub> 余公詞案<sub>二</sub> 別宗章  
 我国君新立<sub>一</sub> 異邦特<sub>レ</sub> 賀<sub>レ</sub> 来<sub>一</sub>  
 千程煙水遠<sub>一</sub> 一幅錦風開<sub>一</sub>  
 京寺暫留<sub>レ</sub> 駕<sub>一</sub> 駅亭幾<sub>レ</sub> 掃<sub>レ</sub> 埃<sub>一</sub>  
 風雲時際会<sub>一</sub> 仰<sub>レ</sub> 看<sub>レ</sub> 翰林才<sub>一</sub>  
 次<sub>二</sub> 謝<sub>レ</sub> 別宗詞案<sub>一</sub> 成翠虚走稿  
 幸<sub>二</sub> 際<sub>一</sub> 敦修日<sub>一</sub> 仙查海外<sub>一</sub> 来<sub>一</sub>



別宗祖縁和尚頂相  
（京都相国寺慈照院蔵）



滄浪洪世泰筆跡（相国寺慈照院蔵）

白頭鯨浪遠<sub>一</sub> 青晒鳳声開<sub>一</sub>  
 瓊屑罪<sub>二</sub> 清話<sub>一</sub> 瑤篇絶<sub>二</sub> 点埃<sub>一</sub>  
 草原多<sub>二</sub> 高人<sub>一</sub> 先<sub>レ</sub> 教<sub>二</sub> 二公才<sub>一</sub>  
 壬戌仲秋朝鮮製述宦官 成翠虚走稿  
 奉<sub>レ</sub> 謝<sub>二</sub> 別宗詞案<sub>一</sub>  
 两国修<sub>二</sub> 隣好<sub>一</sub> 仙槎万里<sub>一</sub> 来<sub>一</sub>  
 流光嗟<sub>レ</sub> 不<sub>レ</sub> 住<sub>一</sub> 鬢抱苦<sub>レ</sub> 難<sub>レ</sub> 開<sub>一</sub>  
 滄海風生<sub>レ</sub> 浪<sub>一</sub> 長途雨洗<sub>レ</sub> 埃<sub>一</sub>  
 詞壇邂逅地<sub>一</sub> 欲<sub>レ</sub> 和<sub>レ</sub> 愧<sub>二</sub> 微才<sub>一</sub>  
 壬秋 鵬溟奉稿

東武歸路小詩一絶奉呈三使大人旅榻下聊慰羈情

別宗

為<sub>レ</sub> 国忘<sub>レ</sub> 身藥糞誠 明君何不<sub>レ</sub> 感<sub>二</sub> 忠情<sub>一</sub>  
 東華万里榮旋日 定識盛名芥<sub>二</sub> 蘭生<sub>一</sub>

奉謝別宗長老詞案

炳炳男兒報<sub>レ</sub> 国誠 異方誰与<sub>レ</sub> 訴<sub>二</sub> 哀情<sub>一</sub>  
 終年遠役君休<sub>レ</sub> 問 王事閑<sub>レ</sub> 心白髮生

和寄別宗長老道案

刀頭明月正浮<sub>レ</sub> 輝 汎<sub>レ</sub> 海星槎万里帰  
 便与<sub>二</sub> 高僧<sub>一</sub> 三笑別 天涯雲雨各分飛  
 辛卯種月 靖庵稿



韓客詞章（京都相国寺慈照院蔵）

# 江戸時代朝鮮通信使聘礼年表

○1607～1624年の訪日名目は「回答兼刷還使」

○1636年以降は「通信使」という名目で派遣されてきた。

また1636年以降、「朝鮮国王」「日本国大君」称号による国書交換が恒例となった。

年	西暦	朝鮮	日本	干支	正使	副使	従事官	聘礼名目		附屬聘礼他	饗宴〔祝奏演〕	特記事項	総人員
								朝鮮側意図	日本側意図				
一六〇七		宣祖四〇	慶長一二	丁未	呂裕吉	慶邊	丁好寛	国交回復	帰途駿府大御所	本多正信・大久保	鎌倉遊覧・駿河湾	五〇四	
一六一七		光海君九	元和三	丁巳	吳允謙	朴梓	李景稷	大坂平定賀	家康表敬	膳奉行	遊覧・洛中遊覧	二〇〇	
一六二四		仁祖二	寛永元	甲子	鄭岬	姜弘重	辛啓栄	家光襲職賀	大御所秀忠聘礼	尾・駿脚相伴饗宴	伏見城聘礼	四二八	
一六三六		仁祖一四	寛永一三	丙子	任統	金世濂	黄屎	泰平賀	日光新造替東照	尾・水脚相伴饗宴	被虜人説諭官巡回	四六〇	
一六四三		仁祖二一	寛永二〇	癸未	尹順之	趙綱	申濡	倭情探索・新	日光東照宮致祭	尾・紀・水脚相伴	朝鮮国王宛將軍別	四七八	
一六五五		孝宗六	明暦元	乙未	趙珩	愈場	南龍翼	倭情探索	日光東照宮およ	〔演能〕〔式三番〕	馬上才はなし。	四八五	
一六八二		肅宗八	天和二	壬戌	尹趾完	李彦綱	朴慶後	世子家網誕生賀	日光東照宮およ	〔演能〕〔式三番〕	馬上才(田安門内)	四七三	
一七一		肅宗三七	正徳元	辛卯	趙泰億	任守幹	李邦彦	家網襲職賀	日光東照宮およ	高家・両長老・宗	馬上才(田安門内)	五〇〇	
一七一九		肅宗四五	享保四	己亥	洪致中	黄璋	李明彦	家網襲職賀	日光東照宮およ	〔演能〕〔式三番〕	更・所司代問慰	四七五	
一七四八		英祖二四	延享五	戊辰	洪啓禧	南泰耆	曹命采	家重襲職賀	大御所吉宗聘礼	紀・尾両脚相伴饗	馬才(田安門内)	四七五	
一七六四		英祖四〇	宝暦一四	甲申	趙曦	李仁培	金相翊	家治襲職賀	世子家治聘礼	紀・水世子相伴饗	馬才(田安門内)	四七七	
一八一		純祖二	文化八	辛未	金履喬	李勉求	廢止	家育襲職賀	家育襲職賀	〔上使・小笠原	對馬府中聘礼	三二八	

(沖尾宏 作成)

**朝鮮通信使関連著作 仲尾 宏 図書室架蔵分のみ**

- 前近代の日本と朝鮮（1989年） 明石書店（後に朝鮮通信使の軌跡と改題）
- 朝鮮通信使と江戸時代の三都（1993年） 明石書店 ★大阪のこと
- 朝鮮通信使と徳川幕府（1997年） 明石書店 ★年次別概説
- 朝鮮通信使の旅（2000年・辛基秀と共著） 明石書店 ★各地の案内
- 朝鮮日々記を読む（2000年 共著） 法蔵館 ★倭乱の実情
- 朝鮮通信使を読みなおす（2006年） 明石書店 ★「鎖国」のこと
- 朝鮮通信使—江戸日本の誠信外交（2007年） 岩波新書 ★概説
- 朝鮮通信使の足跡（2011年） 明石書店 ★室町時代 遺品など
- 朝鮮通信使と京都（2011年）世界人権問題研究センター ★復交
- 朝鮮通信使と壬辰倭乱（2000年） 明石書店 ★「耳塚」「被虜人」
- ユネスコ世界遺産と朝鮮通信使（2017年・町田一仁と共著） 明石書店
- 
- 朝鮮通信使江戸日本への善隣使節（2001年）NHK教育TVテキスト
- このほか講座「人権ゆかりの地をたずねて」世界人権問題研究センター刊行の講演録に  
2010年以降の講演記録が掲載されている。
- 朝鮮義僧松雲大師と徳川家康（2002年・曹永祿と共著）明石書店 ★復交・家康